



新CL寓話一Ⅶ

2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第1部

7. 心の闇を照らす *Hide and Seek*

チャックは妹とかくれんぼをするのが好きでした。お気に入りの隠れ場所は地下室への階段に通じるドアの後ろです。階段の一番上に立って、ドアを閉めます。ドアの隙間から漏れる光だけで、暗やみの中で絶対にみつからないと思ってとても愉快でした。鍵穴に目を押しつけて覗くと妹がドアの前を行ったり来たりして、自分を捜す様子が見えました。

「もしもしお兄さん、いつか階段から落ちますよ、気をつけて！」と母親がチャックに注意しました。「そこは遊ぶのに良い場所ではありませんよ。もし一番下まで落ちたらどうなるかわかる？」

「ウーン」とチャックは考えました。「落ちたらまた階段を登ればいいじゃん」

「だけど階段の一番下は真っ暗なのよ。どうやって階段をあがれるの？」

「ドアからもれる灯りがあるのを知ってるでしょ、お母さん？」

「階段の上から落ちたら怪我をするかもしれないのよ」と母親は忠告しました。

「そうかもね…」とところがチャックはべつのことを考えていました。「もしかしたら、誰かが いつも地下室で灯りとか懐中電灯を付けっぱなしにしたままかもしれない。そうだったら危なくないよ」とチャックは得意げに言いました。

「他の家族がそうするかもしれないわ。でも、付けたままにするなら電機の使用量のこと考えないと。つけたままにするつもりでも家族みんなが時々付け忘れるでしょう」と母親は実際にありうる考えを言いました。

「ぼくは、灯りをつけたままなら、もっと地下室を使うよ」「灯りをつけたままにすれば、みんなが地下室をもっと使うのは確かだよ」とチャックがほのめかしました。

「あなたはものごとをおかしな方にとってますよ」、と母親は反論しました。彼女は息子が本当は母親のいいたいことをわかって話をそらしていると知りました。

「いいから、階段から出て、夕飯の前の手を洗いなさい！」。

数日後にチャックはドアからもれる光が見えるかどうか確かめに階段を降りました。2段降りると何かが頭のとっぺんをなでました。びっくりして飛び上がりました。さらに前に進むと、また頭をなぞられました。それは電球からの紐でした。紐をす速く引くと地下室は鋭い光に照らされ洪水状態でした。チャックは大発見をしたのです。

この物語は自分が本当に考えていることを知るのを恐れていた生徒さんのために書かれました。彼女は心の暗い地下室にある恐ろしくてひどい考えを認めるのを恐れていました。

心の隠された部分は疑いと同時にインスピレーション、恐れは喜び、創造力をもたらします。チャックが地下室を探検するかのよう、私たちは自分の心を探検できます。理解と受け入れる光は心の暗い部分を明るくさせます。(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)